

會 報



1958

舞 台 照 明 家 協 會

海 市

海市この頬杖くぐるおもかげや

桃青む木の隊商の木をゆけり

ひとひらの蝶吹かれるし飛行場

昼顔の見へるひるすぎぼるとがる

四 雨

— 目 次 —

巻頭言

世界的になる道…………… 遠山 静雄 (1)

舞台照明昔ばなし(座談会) (2)…………… (2)

舞台照明家の封建制と近代性……………

…………… 滝尾 照雄 (3)

舞踊の場合…………… 竹内 正夫 (7)

ポリシヨイとニューヨーク・シテイ……………

…………… 大庭 三郎 (4)

中国訪問公演のノートから (1)……………

…………… 梶 孝三 (10)

素人と専門家…………… 小川 昇 (4)

声…………… (6)

事務局通信…………… (9)

ニュース…………… (12)

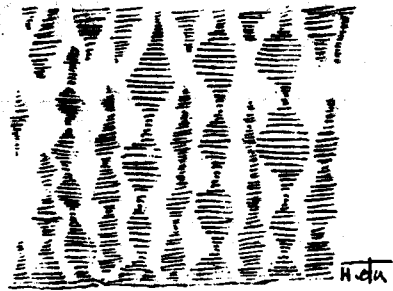
編集後記…………… (裏表紙)

★ ★ ★ ★

カ ッ ト…………… 太田 弘道

報 會

第 3 号



言 頭 卷

世界的になる道

遠 山 静 雄

演劇の永い歴史に於て、舞台照明の発達は極めて短い歴史をもっているに過ぎない。それは、人工光源の発達、特に白熱電灯の発明が十九世紀の終り頃であつたことに起因するのである。

この浅い歴史に於て、舞台照明は、舞台芸術に大きな革命をもたらさず、舞台の上の新しい美と、劇術の新しい方法を創造した。そして今や舞台照明の力なくしては、舞台芸術はあり得ない状態になつてしまつた。

舞台照明の方法は、更に映画、テレビジョンのスタジオに浸透して、機械、器具、設備等の発達普及を促進している。日本に於けるこの種の工業は約四十年の歴史をもっている。初期に於てはヨーロッパ、特にドイツの機械器具の影響を受けた事が多い。それは、全世界に於てドイツがこの方面で先進して来たことによると同時にドイツの劇芸術理論が日本の新劇界に浸透して来たこと、並行する。更にアメリカ合衆国の機械器具も影響を与え、日本人の優れた芸術的感覚と工業技術とが加わつて、現在日本独自の製品を生み出すに至つたのである。右は最近私が ASIAN TRADE と云う雑誌へ書いた原稿の一部であります。

この文章を書き乍ら、自らあるいて来た道をふり返つて見ました。そして日本の舞台照明の進んで来た経過を回顧して見ました。

四十年前、先ず私の念願したことは、この国によい舞台照明設備の出現すること、優れた舞台照明技術者の輩出することでありました。

我國の舞台照明器機製造は幸い業者の不撓の努力によつて、すぐれた製品を生産するに至り、も早や欧米からの輸入を必要としないようになり、更に海外へ輸出する氣運にまで及んで参りました。慶賀の至りであります。

一方、専門技術者の点に於いては、既に本協会だけでも会員二百名を越すに至つたのでありますから、またその盛況をたゞえていゝと思ひます。

たゞこゝで、会員の皆さんに更に御一考願いたいと言附け加へさせていただきますのであります。

技術者の数はもとよりふえなければなりません、同時にその質の向上が大切であります。御承知の通り舞台照明は工学的知識と芸術的創造力と両者相まつて完璧な成果の得られる仕事であります。一般に人間の嗜好や性状から相反する両端にある右の二つの能力を兼ね備えよと云う注文は、一見無理の様にも見えましよう。然しこの両者を或程度マスターしなければ、舞台照明家として、それが設計者であると操作技術者であるとかゝわらず、立派に一人前だとは云われないうでしよう。

技術面、工学的知識は、一通りの勉強で習得出来るものであります。芸術的創造の面は終生の勉強であります。この両面に、各自の磨きかけられることによつて、ほんとうに日本の舞台照明が大手を振つて世界に闊歩出来る日が来るのだと思つています。

舞台照明昔ばなし

(第二回)



春 為 藤 遠
郎 次 富 茂 丸
精 田 和
郎 太 万 保 田 久
男 美 喜 沢 穴
市 鶴 川 石
雄 虎 野 上
昇 川 小
午 甲 条 上
夫 佐 木 篠
臣 道 保 神
雄 静 山 遠
郎 二 田 前

昭和33年2月11日

— 於 鉢巻岡田 —

出席者

(五十音順)



吹ポヤ・ルリ灯

小川 前回にも一寸出たんですけど、吹ポヤについても少しお話し願います。…昔の吹ポヤは火なんか出なくて、安全だったけれども、今の吹ポヤは違うんじゃないですか。

上野 そう、今の吹ポヤは懐炉灰を使うけれども、昔のは松脂で、油のしみが出るだけなんだ。紙にもうつらないですよ。

篠木 僕ら粉にするんで松脂をたいた事を覚えてます。今は他のところでやっているけれど、昔は電気部とか照明部の人がやつてましたね。

小川 今は松脂なんか使わないんじゃないですか。

上野 最近は懐炉灰でも消えないやつを使う。すぐ消えちゃうやつじゃない。

和田 昔僕等のときは、金箔を使つた。

上条 フツと吹いても火が出ない。
上野 強く吹くと松脂がみんな穴にまつてしまふ。



神保 神保 神保 神保
神保 神保 神保 神保
神保 神保 神保 神保
神保 神保 神保 神保

上野 燃えてるうちに飛ばしてしまつたんじゃないかと思うんだが……。

篠木 あの時の原因は、吹ポヤちゃんなくてスモーク、発煙筒らしいです。発煙筒というのは火をつけると、浸初煙になる前にしばらく火の粉が出る。あれが砂について焦げだした。火の粉がついてるのを気付かず上へ飛ばしたので、燃え出してパラパラ落ちて来た。上では消せないから下へ下したところが炎になつた。それを見てドアを開けたものだから、新しい空気が入つて、ぽうつと燃えたという事らしいです。

遠山 結局、原因を色々調査しているらしいが……。

篠木 これから、本火が全々使えなくなる、芝居がやりにくくて困るんじゃないですか。そのためには、扱う人が馴れているということ、吹ポヤにしても、スモークにしても、扱い方を教えることの方が、だゞ止めさせることよりも、むしろ大切なことじゃないかと思うんだけ

れど。

久保田 これも照明の仕事じゃないと思うけど、ルリ灯なんているのがあるましたね。あれは小道具の仕事ですね。

篠木 仕事としては小道具、目的は照

照だが。
遠山 ルリ灯というのは灯油でしょう。僕は大阪で大道具が張り紙をやつていたので見たら、反古が入っている。それに古い番付があつて名前が書いてある。そばにランプ方向がしと書いてあつた。

上条 ルリ灯は丸ランプじゃないですかね。

篠木 カンテラですよ。

小川 都踊でフィナーレにカンテラを使つてたが、大へんな油煙ですよ。真黒になつてしまふ。

ガス・マントル・ランプ

遠藤 照明で新しいと思つたのは五代目菊五郎(明治元年に襲名三十六年二月死亡)が「羅漢」を演つた時だ。岩が割れると羅漢が出る。背後に裸のガスがつく。

篠木 後光みたいについたわけですね。

遠藤 これはとつても喝采だつた。菊五郎らしいですね。

篠木 ガスの管を背負つたのですね。

久保田 ガスのイルミネーションというの、浅草あたりの牛屋についてた。

それが風の強い晩にはすごい景気で……それからわれわれの家でもガスがついた。マントルが出来たのはよほどあとです。

篠木 マントルは何年に……。
久保田 四十何年。

篠木 三十年か四十何年。
上条 上向きばかりで下向きのマントルはない。

久保田 二階で騒ぐとこわれる。よく叱られた。

遠藤 大した明るさでした。

遠山 袋みたいにふわつとした。

上条 石油ランプで空気ランプがあつた。

篠木 プンゼントー……。

上条 空気と一緒にすすんですよ。

丸茂 空気ランプを使つた劇場がありませんね。覚えてますよ。

篠木 ずいぶん明るくて、芝居で使つてたわけですね。

丸茂 つるして使つてた。

上野 先生のおつしやるのは丸いホヤのランプで反射がついてたやつ。

篠木 プラケットですね。

上野 鏡の丸いやつ。
上条 掃除をするのが大へんだつた。

モルモット・赤テル青テル

久保田 目つぶしの間に青い火をつけたのはどこですか。

上野 新富座。モルモット式でやつ

た。フツドの前ところにランプを置いた。

小川 モルモットというテクニクがありましたね。

上野 初め天勝がこの手をつかつた。

小川 天勝なんかは、しよつちゆう洋行していろいろネタを仕入れて来たでしよ。

上条 暗転ランプというのはモルモットと同じですね。

篠木 お客の目をつぶして幻覚を覚えさせて、うしろを黒いバツクにして中で人間が動いている。そうすると、しやれつこりべが飛んだり、あつちへくついたり、こつちへくついたり……。

小川 ブラツク、ライトの効果をねらつたものだね。

篠木 用途としては同じものだね。ウルトラバイオレットのフィルターがなかったから、ああいり手をやつたが、面白ね。

小川 それが劇場に入つて目つぶしに使われたんですね。

久保田 そり。目つぶしは中国へ行つたらあつた。日本のまねといふことでした。

小川 今でも大阪の歌舞伎では使つています。

久保田 赤テル青テルというのは何んです。

上条 あれは花火です。日の出なんかのとき赤テルをもやすと、夜明けみたい

になる。

篠木 電気花火のあれですね。

遠山 煙も出る。

篠木 あの時は団十郎(明治七年襲名、三十六年九月死亡)や左団次(初代。明治三十七年八月死亡)が新しいものと取りかえていた時代でした。

久保田 初代目左団次は、大へん新し物好きで……。

篠木 それにこたえて松井さん(藪太郎。もと左団次の弟子、後に歌舞伎座に入りおそらく日本で初めて照明らしい仕事をした)と花火屋の千葉勝さんがいろいろ相談して、今考えればこれが照明であるという形を使つたわけですね。

大芝居・小芝居

上条 ところで、昔は大芝居と小芝居に分れていましたね、われわれは初めてから大芝居じゃない。浅草の芝居は緞帳があつたが、大芝居はみんな引幕ばかりだつた。それで小芝居のことを緞帳芝居といつたものです。キノオラマの影響を受けて、日露戦争後今の大勝館の隣にユニバースが出来た。やることはキノオラマと同じで、電気応用ユニバースといつた。そのころ吉沢商会というのがあつて、そこに大沢という小僧がいた、大沢はアメリカにいろいろな機械の研究に行つた。帰つて来ていろいろなものを作つて、独立して大沢商会という幻灯屋をやつた。それが明治四十年。私が浅草で芝

居の仕事をしたのが明治四十三年。その時分にもう幻灯機械があつた。その幻灯機械で月やなんかを出していた。また、オペラ館でオペラダンスというのがあつて、背景が全部幻灯なんだ。大芝居の照明よりも小芝居の照明は進歩していた。アークをどんどん使つていた。色もゼラチンがないから色ガラスです。

遠藤 色変りの電気で一番早いのは、團十郎の「高時」だ。どこでどうしたのか知らないけれども、黄色だの赤だの変わる。子供満足したいなもの。

榎木 何を使つたの、ガラスでしょうね。

上条 ガラスでしょう。

久保田 カーマンスタヂオで踊りを踊る。だからあかりをあてることの知識はかなり前からあつた。

上条 オペラダンスもそうですね。

久保田 頂度その頃、明治四十三年だつたか、東京に大へんな大雪が降つた。歌舞伎座に初めて団蔵が来て「仁木」をやつたとき、雪のためあかりが消えてしまつた。そのとき急ぎに照り出しを使つて、それで効果を上げた。

遠藤 お客が歌舞伎座へ泊つてしまつた。
久保田 四月の八日、明治四十四年、三年ですか。
上条 大雪は吉原の大火の前……。
丸茂 東京中の電話線が全部切れてた。それが水気を含んでたれ下り……。

久保田 まるで樹氷だ。
上条 あの年は水に雪に火事でした。日本橋へ船が横づけになつていたので覚えてる……。

(文献によると、明治四十一年四月九日、大雪の日に歌舞伎座場内の電灯が一時に消えたので、舞台は大まごつき、直ちに後見が出て、差出しの臘燭一つで仁木弾正の引つ込みを見せたがその時の凄さはぞつとするようで、殊に味ひがあつたとある。なお団蔵はその時七十三才、四十四年九月に死亡している)

螢・焼 耐火

榎木 お話も明治の末近くになつたよりですから、ここで帝劇初期のお話を秀さん(秀文逸氏)にお伺いするといいますが、今日お見えにならないので、その頃のお話を一つ……。

小川 帝劇の出来たのは明治四十四年三月です。

遠山 その時代、僕は田舎にいたから……。

丸茂 私は明治四十五年ですか、帝劇の見学に行つただけで何も知らない。たゞ珍しいと思つて見ただけで……。

久保田 一応新しい、いろんな器具が外国から入つて来たんだから、使われたんだらうな。
榎木 では帝劇の開演中……大正の初期ですね。こんなことをしていた。あんなことをしていたなどということについて……。

久保田 これは誰にきいたかよくわからないが、三崎座で女芝居「乳房の櫻」をやつた。螢が飛んでる。その仕掛けというものを子供のときに聞いたが、穴をあけて青いガラスをはめて、そのうしろを明りを持つて馳け出して歩く。

榎木 大へんな先覚者ですね。

久保田 螢が飛ぶでしょう。昔の螢の仕掛けというのはどうやつたでしょうね。

榎木 昔は動かない螢をたくさんこしらえて、うしろの光源を動かしたんですかね。今の豆球を動かすより実感があつてよかつたかも知れない。

久保田 「戲場訓蒙図絵」あれには照明に関する仕掛けも出てると思う。



和田 精 和 田 焼耐火な
んかの出し方もで
てる……。

小川 あれは針金のしんを入れた綿に焼酎をしめして、燃えないような針金でつる。結局アルコール。

榎木 薬品として明ばんを入れる。すると青い火が出る。

上条 アルコールだけだと火が見えにくい。
ポーター・ライト、デンマー
小川 電灯をポーター、ライトの形にして使つたのは……。

榎木 帝劇の時代にはあつたですね。
上条 あつたですよ。電球はカーボンだつたが……。

遠山 初めて私が帝劇の配電盤の陰から見て驚いたのは、デンマーを絞ると一本のポーターがこちらから向こうへつて行く。これは一寸おかしいと思つけど、そうゆう記憶がある。

上野 新富座に水抵抗があつて、東洋電氣のおやじが初めて使つた。その頃は水抵抗と螺旋抵抗しかなかった。

上野 帝劇が初めて松竹は遅れてい
る。
上条 小さな劇場はポーター、ライトがあつたけれども、板をかこつて電気をぶら下げただけ。

小川 ポーターを使い始めたときには、すぐに染玉にしたのかしら……。

上条 ザボン・エナメルで、その時分にはニスはない。東京のはグリーンですよ。青竹しかなかった。アンバーはありましたけど、ブルーは大坂だけ、西川求林堂。

榎木 それで月光だとか何かには投光器のレンズにエナメルを染めて使つたのですね。アーク灯というのはありますか。
上野 松竹にはスポットというのはなかつた。風呂桶のうしろに黒い幕はつて操作する。……アンナ・パロプアが帝劇へかかつたのはいつ頃ですかね。松竹では、ロシアから持つて来た球の形を

まねて作った。あのときガンドーみたいなイルミライトを持つて来ましたよ。

・ 踏影会と研究座

楠木 大正の初めは帝劇を範として、段々照明が近代化して来た。……何か意欲的な舞台はありませんか。

和田 帝劇でやつた踏影会とき、大正十二年ごろです。照明の色を変えて背景を変えたことがあるんです。

楠木 パプローを使った背景じやなかつたんですか。

小川 純然たるカラー、チェンヂです。

遠山 踏影会の第二回の公演で栄三郎が、「とりかぶ」という踊をやつたが、森の中から月の景色に変わる二つの場面を、田中良さんが一枚の背景に描いて、それを照明で変えるようにした。片一方の色をつける一つの画面が見え、一つが消える。月の方が見ると森が消えるという具合に、そのときは光源が弱いし、もちろんゼラチンもないから染球でやつた。正面舞台全部をバツクにしないで枠の中だけを絵にした。ボーダーにはアンバーとブルーの二色を使つたが、それだけじゃたらないから、その枠のふちへ電球を配列した。

楠木 客席から相当の距離がないと、やはりボロが出ませんか。

遠山 舞台端から四間ぐらゐのところかな。

楠木 そのくらいあるとできる。僕らそれに似たことをやりました。山田新伴先生がやつた金曜会公演の「忠義」という出しものとき、その一番ラストの場面で、討入したあとで夜中から朝までの景色が変る。富士山の絵を書いたり、雪の絵を書いたりしてあつて、夜があけて来たら山が出て来て雪が出て来た。

和田 大正の震災直前ぐらゐの舞台で、もう一つ意欲的なのは「研究座」でしょう。

遠山 これは和田君にも手伝つてもらつた。「星飛ぶ夜」という台本があつてアラビヤかなんかの砂漠の空を流星が飛ぶ。豆球を流れ星にして和田君に毎日やつてもらつた。

和田 吊しておいて離すと飛ぶ。それしか方法がない。

遠山 まかり間違つると砂の上に星がもぐり込んで。そこで消す。

和田 飛ばすきつかけと豆球を消す息が成功すればうまくいく。下手するとボロを出す。

上野 「死とその前夜」も遠山さんでしたか。

遠山 ええ、有島武郎の「死とその前夜」。あれは死神がいる場面と、現実の家庭とが交替に出る。その前に命を象徴する火がボヤボヤと燃えてる。これに何を使おうかと思つて、いろいろ研究して、固形アルコールを使いました。

楠木 青白い光だ。

遠山 その上からトップ、ライトを照らした。青白いものが出なければ困るのでも、ツールテイントという、夜でも同じ昼光色の色に見える器具があつたので、そのためにそれを一つ買つて来て使いました。ツールテイントのサス・スポットは、方向性を持つていて反射面がついてる。固形アルコールと併用して感じを出した。

楠木 その時分には今と違つて、照明器具でも、あれがほしい、これがほしいというわけにはいかなかつたから、それに適するようなもの、特別に作らなければならなかつたときもあつたでしょう、非常に苦労したわけですね。

遠山 エリアナ・パプロアが、東京で公演したでしょう。そのときにスポットは投光器を使つた。色がないから大きな四角な色ガラスを前において使つたら、すぐにピンと割れてだめになつた。やはりそこまで考えが及ばない。今迄は、ボーダー位にはガラスでもよかつたんだが、投光器だとすぐ割れるんだ。

楠木 セロハンは未だなかつたんでしょう。

遠山 ありました。東京電気で作つたセルロイドの薄い幕を舞台で使つた。「玄宗と陽貴妃」という出しもの時、遠く火事があつて、真ん中にあすま家があり、玄宗がいて火事の照り返しがあつた。前に切り出しがあつたから、その奥へライトを置いてセルロイドを置いた

ら、電球がくつついて、ほんとうに燃え出した。そういう失敗もしたけれど、材料がなかつたから……。

小川 お話もだんだん震災に近づいて来ましたがこの続きは次回へ回すことにします。

△以下次号▽

賛助会員の皆様へ

舞台照明協会の趣旨に御賛同下さいまして御協力誠にありがとうございます。協会も発足初歩のことです。御期待に添うような活動も致して居りませんが、会報の発行もようやく軌道に乗つて参りましたので近く月刊に致したいと考えて居ります。何卒今後ともよろしくお願い申し上げます。尚ほ賛助会員の御芳名は毎号掲載させていただきますが特に御希望の方には規定の半額料金にて広告もお取扱致しますからお申込み下さい。

編集部

舞台照明家の封建性と近代性

滝 尾 輝 雄

吾が国に於ける、舞台照明の発達は、
こゝ三十年位の間に、目覚ましいものがある。

それは、単に照明技術乃至技巧のみでなく照明機構に於てもである。勿論この両者は、常に相互関係にあり、両者は互に作用し合い、夫々は発達して来たのである。

舞台芸術の世界の中で、他の部門に比較して、最も近代的機能を持つ照明の部門が、たまたま他面に於て、最も封建的一面を持つてゐることは、しばしば感ぜられる大きなむじゆんである。

その封建性とは何んな面かと云へば照明家自身の現在の在り方である。

舞台照明家というものが、はつきり分離され、独立したのは、未だ歴史的にいつて日が浅く、それまでは、大道具師が兼務していた時代があつた。勿論その当時の照明機構は、現在のような形とは、及びもつかない、唯単に舞台に電灯が施設されたというだけのこと、これを扱う者が差し当つてなく、取敢えず大道具師の一部のものにということ便宜的なことであつたのである。

ところが、近代文明の発達は、急速に、その歩を早め、照明機構の面でも、

現在あるが如きものに、遂次變つて来た。そしてより複雑性をおびて来て、一
大道具師の手には負えなくなり、こゝに専門的な人間が必要とされた。そこで最初に求められたことは、この照明機構を安全に、正しく扱え得る者をということ、電氣屋さんが必要とされた。

これが舞台照明家の、そもその始まりである。そうしてその後は、舞台照明家としての分野は、完全に独立して、一電氣屋さんであるということのみでは不
充分で、舞台芸術家としての見識と自負
とを持たなければならぬようになって来た。これが、現在の舞台照明家に最も必要なことであり、求められていること
でもある。

又他方、舞台照明家の創成期頃より、
現在もなお存続している組織として、研究
究所システムがある。

これは、創立当時は名の如く、純すいに研究機関の性格を持つていたのであつたが、その後の在り方に対しては、一概にそのまゝであるということとは出来ないと思はれる。

一、二の研究所をのぞいては、殆んど
の研究所が、新しい後進者に対する育成
を行うと共に、新しい技術的研究という

スローガンを振りかざし乍ら、事實は舞台照明業口入れ稼業的のれんを下げているのである。勿論口入れ稼業的のれんが悪いというのではなく、現代のような、特に戦後の社会機構の中では研究所というものもより企業化されなければならぬことは事實であるが、その在り方を明朗にしなければならぬと思う。若い人達が、納得して、従いて来られるようになければならぬと思う。

この若い人達の納得するということの
限界は、大変にむづかしい線である。若い人達も如何に近代文明の発達した今日
でさえ、芸術の世界だけは、科学の世界
と違い、ある程度の徒弟制度的継承の仕
方が必要であること位は、承知している
と思ひし、又それだけに、むじゆんを感じ
てゐると思ふ。

それを如何に合理化し得るかという問
題が大切である。

舞台照明という仕事は、技術的なものを要求されている仕事であり、その技術的なものは、やはり徒弟制度的と云つては極端だが、それに近い形で身につけていかなければならず、しかも、扱はれて
いるものは、最も近代的機構を有するものであるということ、一寸ちぐはぐな
感じがするが、前にも述べた如くこのむ
じゆんは、舞台照明家の在り方を如何に
明朗に、近代的にすることこそ、次代への
発展要素であると思ふ。

(新賛助会員)

竜 電 社

港区芝新橋4ノ6
TEL (43) 7908・6259・6242

大和証券ホール

22度の冷房装置と一

完備した照明設備一

80 廻路 プリセット 操作配電盤

3 段45本建オール選択調光装置

中央区呉服橋角大和証券ビル8階TEL(23)0196

「照明についての文句や注文を」と云はれて承知しましたと安直に返事はしたものの、いざ何を言おうかなと考えて見ると、これと言う事がない。

いろいろな舞踊公演を客席から眺めている時には所々不満もないわけではないが、照明との協同プランによつて予期以上の成果を挙げている場合が多い。然し最近の創作舞踊の中には照明効果に頼りすぎている傾向があるようだ。余りにも舞台が暗すぎるので尋ねてみると舞踊家からの注文なので……と聞いて啞然とした事もある。内容的にわかり難く、暗い舞台でもやもやするのが芸術舞踊なのかしらとつい素人が首をかしげるのも無理ではない。

私は最近特に眼がわるくなつたので大きいホールでは八倍の双眼鏡を持つて行くが、距離も接近し明るさも倍加する。それでいて決して効果を失つていないと思はれない。舞台全体の何ルツクス？かを明るくしても、フニキが出ないという事はないはずである。

舞 踊 の 場 合

夫 正 内 竹

一度実験していたゞき度いものである。

パレエの場合でも時々主役に猛烈なスポットをあて、その円光が背景やセットを白々と見せ與ぞめする場所があるが、外国では特殊の場合も別として、主役にスポットがあつても決して他をさまたけてはいない。これは舞台が浅かつたりタツパが低いなど設備上の問題になるが、ある程度の不備は補なはれると思う。

現在の欧米には、日本の様な創作舞踊は極めて稀で、前衛派の人々でも新作となつてくるものはあつても日本の様に独想的な創作は少い。従つて特殊な照明効果が必要としないうのかも知れないが、日本の照明家は欧米の人々に較べてはるかに高度な芸術家であり、よい感覚とたゆまない研究を続けられていることを確信し、敬服している一人である。

(編集部註、筆者は舞踊家)



職 人 と 芸 術 家

芝居の仕事のなかで、よくこう云う批判をされることがある。

あの人は、実に職人的だ。とても良い人だが……とか。

がしかし、この職人的と云う言葉の響きは、どうも昔から、全然芸術性がないとか、芸術的でないかと思はれて来た。それは、職人と云うことがどう云うものであるか考えずに、あるいは、職人と云はれる人達に対する、素人的な人達の、ねたみ乃至ひがみから、そう思はれて来たように見える。

元来、昔からの、名人と云はれる人達の仕事には、随分立派なものが残つて居り、現在でも、良い作品を生み出す人達は、名人と云はれ、芸術的価値の高いものを創り出している。職人と云う名の芸術家が昔からいくらもいたわけである。

芸術家と云はれたり、芸術的に良い仕事をしたり、芸術的価値の高いものを創り出している人達は、大なり小なり職人である筈であり、職人であらねばならぬと思う。勿論この場合の職人と云うのは、職人的であると云うことであり、いゝ意味の職人であると云うことである。即ち、芸術家としての要素の中には、

良キテクニシアンであると云うことが必要であり、良キテクニシアンであればこそ、芸術的にも価値あるものが創り出されるのではないかと思う。

振り返つて、吾々照明家の仕事と云うものを考えてみても、より良キ仕事をするためには、先づ第一に技術的に、上達する必要がある、それを基礎にしてこそ、良い作品を創り出すことが出来るのだと思う。

唯観念的にのみ走つて、實際を忘れた、創造方法には、無理があり、破綻があると思う。

滝尾 輝 雄

總 会 予 告

会員みなさん、総会を近く開催したいと思ひます。というところ、そうかいそうかいと聞き流しにする方もおありでしょうが、今度の総会は、しかつめらしくない、浴衣がけ的な、懇親会でありリクリエーションにしたいと思ひます。大体七月中旬に予定していますから、夏の夜空に星と人工衛星を仰ぎ乍ら、こうかく泡を飛ばさず、ビール泡でも飛ばしたいと思ひます。是非ともお誘ひ合せの上、賑々しく御来場の程を、すみからすみまで、ずいーと……。

と ニューヨークシティ



大 庭 三 郎



昨年秋と、今年の春に二つの大きなバレエ団が来日した。秋に来たポリシヨイは有名なダンサー達はともかく、美術監督には、ベトロフスキーという人がやつて来た。装置、衣裳、照明の責任者で五十五六才、大変温和な人であつた。照明の打合せに行くと先づバレエの出しもの、一つ一つをよく説明してくれた。

新宿コマ劇場の舞台を見て大変心配だといふと、こんなギリシヤ時代の劇場で照明をした事がないから、そのエフェクトがよくわからないと云う。舞台稽古で明りを出しスポットの操作がはじまり、段々見当がついてくると、安心して来たようであつた。安心してからは、こちらに全部プランもまかせてくれた。然し不満があるところ、どうだろう。私はこう考へるが君はどう思う……と自分の考へを決して押つけるような事はしない、巧な外交官でもあつた。照明のきめ方も、大ざつばなようで肝心な所はしつかりときめていた。

この春のニューヨーク・シティはアメリカでは有名な、ロイヤル・ゼンタール女史の照明プランで、そのプランを忠実に実行するべく技術監督として、ナチン・ポーチア女史が来た。よく働き、よく食べ、よく飲み、よく怒り、よく笑う天真爛漫なミス三十五才であつた。仕事時間は実に正確で九時といふと、きつかりに始まり、ランチタイムも何分と宣告した。照明プランも考へ方は何ら変つた事はないが、唯照明の常識を正確に実施した。スポットライトの配光位置等五センチのずれも絶対に妥協しなかつた。ゼラチンはすべて持参した。使用した色は、スペシアル・ラベンダー(東京ゼラチン88号に少し青味がある)とライト・フレツシュ・ピンク(16よりうすい)とスペシアル・ステイル・ブルー(79号より青味強し)の三色が基準になつて構成され、これらをいかに均等に舞台へ配光するかにあつた。ロイヤル・ゼンタール女史のこの三つの色は有名であり、出来得るかぎ

△おもしろこと▽

素人と専門家

小川昇

或る一つのことに入つて行く場合に、その人の能力や、向不向のあることは勿論であるが、比較的誰にでも入り易いものとそうでないものがある。非常に高度の学問がなければ研究の初歩にも手がつけられないようなものもあるであらうし、とつときは簡単だがさして始めてみたら案外難かしいというようなものもある。舞台照明の仕事などはどちらかといふと後者に属するものではないだろうか。

近頃は大きい舞台が照明設備もなかなか良くなつて来たから、配電盤のスキツチを入れさへすれば舞台は一応明るくなるように出来ているし、スポットライトも適当に配置されていて、ゼラチンペーパーの色も豊富に揃つているので一寸器用な人なら誰でも舞台照明らしいものを作ることはそんなに難しいことではない。スポットライトの操作についても、唯指定された色を入れて舞台を照らすというだけのことなら全く誰にでも出来ることである。だから舞台照明を専門的に勉強する事などはつばらないことだと考へる人もあるかも知れない。素人ならそれでもよいかも知れないが、誰にでも出来ることしか出来ないのでは専門家とは

舞台照明用スライド専門製作

日本光画K.K.

・田仲スライド・

東京都中央区八雲洲5の5(京橋区内)

電話28局7471 振替東京112946

創業30年の歴史が語る最高の技術

天然色他一設スライド製作

イヨジヨイ

りこの三つの配色で整理している。どうしても整理できない時に、ストロウ、ライト・アンバー、チョコレート、ライト・グリーン、レッド等を適宜に少量使用して、パレエに独特のやわらかさを与へていた。なまぬるい所もあつたが、御婦人らしい吾々には感覚は学ぶ所もあり、日本にもそろそろ女の照明設計家が出て欲しいとさえ考えた。

アメリカでは、ステージ・マネジャーという舞台に職務がある。これは舞台に於けるキツカケの総責任者で音楽、大道具、照明、幕の上げ下げのキユーを出す係で、照明係は単独でキツカケはとらない事になつてゐる。今回も総てこのステージ・マネジャーのキユーで動き、極めて気楽であつた。

前者のポリシヨイがのんびりと大づかみな事に比べて、都会的で非常に綿密で神経質な照明プランはよく国民性を表はしてゐたように思はれ興味があつた。

★ ★ ★ ★ ★

事務局通信

No. 3

○会報第二号編集会議 (二月廿五日)

於小川照明研究所

出席者 相馬、田中、梶、滝尾にて会
員名簿の校正をする。

○会報第二号発行 (五日六日)

○事務局会議 (五月十五日) 於小川
照明研究所。

出席者 滝尾、梶、小林、大野にて会
報第三号の編集プランを左記の様に決

定する。

★発行予定日 六月二十日

★巻頭言 遠山静雄、座談会(2)

中国事情(対談) 穴沢喜美男、梶孝

三、ポリシヨイ・ニューヨーク・シ

テイのバレエ大庭三郎、大阪新歌舞

伎座の構想喜多松太郎、舞台照度測

定に関して篠木佐夫、の記事を予定
する。

○理事会 五月十六日 於築地文明堂

出席者 小川、相馬、沼田、天野、和
田、根本、齊藤、相原、小林、大野、

いえない。専門家になるにはそれだけの
専門的な勉強が必要である。

どんなことでも基礎を身につけるのは
並大抵のことではないが基礎がしっかり
していなければいつまでたつても本当の
ものは出来上らない。この基礎を身に付
けることが専門的な勉強なのであつて舞
台照明も決して例外ではない。

舞台照明の勉強というところ、とかく照明
そのものに片寄りがちであるけれどもむ
しろそれ以前に照明するもの、勉強が大
切である。演劇でも舞踊でも、その内容
をしつかり把握しなければそれを照明す
ることは出来ない筈である。我々は一日
も早く舞台照明の基礎を身につけて専門
家として恥しくない舞台照明家になりた
いものである。

滝尾

★会員に関する件

一、会費徴収方法の検討の結果、各
ブロックを再決定する。

一、未納会費の内昭和三十一年十二
月までの一四〇、〇〇〇円を早

急に整理徴集すること。昭和三十
三年一月以降分は別途に考慮
することを決定、賛助会費は担
任者を再検討、決定した。

★テレビ中継放送に対して、演劇協会
美術部の研究費に当るものを照明家

協会としても交渉するべく、次回の
常任理事会に計ることを決定する。
★総会を七月中旬に予定する。

★事務局雑費として月額三千円を計上
し決定する。

○編集会議 五月廿二日 於小川照明研
究所 出席者 小川、相馬、小林、田

中、滝尾、大野

○編集会議 五月廿九日 梶・大野

○編集会議 六月十二日 梶・大野

編集、割付を完了する。

○常任理事会 六月十六日於築地文明堂

出席者 小川昇、篠木佐夫、滝尾輝

雄、秋山易三、土村晶、相馬清恒、田

中恒雄、篠原久、天野万助、梶孝三、

大野洋

一、総会を七月十六日午後九時(場
所未定)に予定し、具体的には事
務局及び常任理事が準備すること
を決定する。

一、前回の理事会で提案されたテレビ
仲継に関する研究費を左記交渉委
員に一任し、具体化するべく決定
する。

委員 小川 昇 篠木 佐夫

松崎 国雄 和田 光弘

上野 虎雄 穴沢喜美男

和田光弘、齊藤政雄両氏より欠席の
電話連絡あり。

中国訪問公演のノートから (1)

—— 北京での印象 —— その一

梶 孝 三

三月十三日—今日ともかく私たちの舞台は、無事初日をあげる事ができた。白毛女は想像以上のうけかたであつた。私は横浜出港以来、初日があくまでのことを想い浮べてみる。

私たち訪中松山バレエ団の全員を乗せたイギリス船アンキン丸が、横浜を出港したのは三日の夜十時半、途中呉港に半日以上も碇泊はしたが、八日午後無事天津郊外の塘沽港に到着した。上陸は午後四時すぎ。中国対外文化協会の方々が出迎へてくれる。主に貨物、それも石炭や鉄石のりを、多く積み降しするらしいこの塘沽港は、なにかそんな港独特のかわいたふんいきをもっている。

私たちは自動車で天津駅へむかつた。一望荒涼と見える緑のない平地だ。木もあり、拓けた耕地なのだが、この附近へはまだ春の新緑が訪れてないのだから。ともかく灰色一色の曠地を車は走る。窓外にだんだん夕暮れがやつてきた。葉のない木立が、その一本一本、梢の先きまで、はつきりとしたシルエットを表わしてくる。

北海道に生れ、そして育つた私の胸に

あの緑のない平地は……どこまでもただ一色につづくあの灰色の平地は、ふと故郷の初春を想い出させる。そのためか日本から一歩外へ出たという気持が、おかしいほど湧いてこない。北京へむかう二時間の汽車の中でも、外の景色はちつとも変らなかつた。ただ時々見える灰色の土塀をもつた家と、木立の細いシルエットだけが、やけに印象的に過ぎていった。

七時頃だつたらう。私たちを乗せた汽車は薄暗い北京の駅へ滑り込んだ。薄暗い、本当に薄暗い。あの目にも眩しいネオンサインと水銀灯の街東京から来た私たちにとつて、北京のプラツトホームはあまりにも薄暗かつた。

だが汽車がピタリとプラツトホームに止つたとき、私たちは急にパアツと明るいなにかを感じた。一時に目の前が明るくなる思いだ。目の錯覚なのだろうか。いや違ふ。美しい、夜目にも美しい中国服を着た、可愛らしい少女たちが、手に手に小さな白い花束を持って出迎えている。素直にのびた黒い髪、純粋で綺麗に輝くつぶらな瞳、美しい桜色した丸

い頬。十代の美しい少女たちが、多勢私たちを取りかこんだのだ。「ニイハオ」「ニイハオ」可愛らしい声で叫び、私たち皆んなに花束を与える。この十代の美しい少女たちは、国立北京舞踊学校の学生たちであつた。

あまりにも違ふ。私たちの知つていて、そして接している十代の少女たちとは、あまりにも違ふ。マンボあり、カリブソあり、ロカビリーあり、シヨート・スカートあり、何んとかラインあり、感傷型あり、狂躁型あり、反抗型あり、……私たちの知つてゐるティン・エーヂャーたちはあまりにも他国的だ。外見こそ日本人と中国人はよく似ている。がだ、その態度にも雰囲気にも瞳の輝きにも、何か大へんな違いがある。この内部から、やさしく、そして明るく輝き出す美しいものは、一体どういふものなんだろう。

私はそこに東洋を感じた。私は初めて東洋を見たような気持ちだ。このことは、出迎えてくれた作家の田漢さんにも歐陽予倩さんにも、演出家の歐陽山尊さんにも、またその他の方々にも、固い握手をかわしながら感ずることができた。何か現在の私たちからは忘れ去られてしまつた、遠い過去の記憶のようなものが、そこにはある。大きな伝統の力が、この人たちのなかに自然な姿で動いているのかも知れない。私は北京での第一歩にそんな印象をうけ、バスに揺られながら城門をくぐりホテルへ向つて行つ

た。北京の夜は東京の夜にくらべ実に暗い。だがそこに住む人たちの心の中は、それ以上に明るく、強かかやいているのじやなからうか。

「親愛的日本友朋們……」(親愛なる日本の友人の皆さん……) 食事前のあたたかい挨拶。……私の脳裏にふと

乗船前行われた、横浜埠頭での歡送夕食会のことや浮んでくる。日中友好協会、日中交流協会、そして新劇関係の方たちなどの、多くの挨拶やお話、そこではあつた。でも私は、そこで舞踊家のお話を、ついに聞くことができなかった。私の感違いなかもしれない。私は舞踊家の多くを知らない。でも多少は知つてゐる。日本の若いバレエ団が、おそらく初めて海を渡つて公演する。それなのに……松山さんの存在がそれほどバレエ界の間には薄いのだろうか。それとも……いや、多分日本の舞踊家たちはすぐく忙がしいんだらう。……とにかく日本はすべて忙がしすぎる。こんな感じを私は乗船前にうけたものだ。一裏方の私としては関係のないことかもしれないが、ちよつと寂しかつた。

その日はちよつと国際婦人デーであつた。私たちは夕食後その会場へ出かけた。葉のない並木が両側に立ち並ぶ夜の北京の街は静かに暮れていた。会場は明るかつた。いろいろな国の婦人たちが多勢、夫や子供と共にその一夜を楽しんでいる。一階と二階が講堂、舞台ではバレ

エがおこなわれていた。三階はダンスパーティ。その他の室は子供たちのゲーム室。廊下やロビーではお茶とお菓子のサービスがなされている。私たちも多くの人々の中に交つて、バレエを楽しみ、ゲーム室の子供たちの姿に思はずほほえみ、その会場の中を歩きまわつた。そして私は或る一つことに気付いた。会場の中のかのどこにも、廊下やロビーの隅にいたるまで、芥が一つも落ちていない。

煙草の吸殻は必ず吸殻入れに入れられ、お菓子の包装紙などは必ず紙屑入れに捨てられてある。私の気付いたのはこのことであつた。こんなことはごくあたりまえのことかもしれない。だがこのあたりまえのことというものはなかなか難しいことのようにだ。私たちの知つている人間の社会ではとくに難しきものである。新しい中国では開放後、きつとこのあたりまえのことからいろいろ始められて来たんだらう。そして、あたりまえのことが出来る社会になつて来たんだらう……。

舞台で行なわれていた踊りは、私の知らないバレエであつた。講堂程度の舞台はただフラッドに明るく照らされていた。二キロ位のスポットだらう。二階の客席にむき出しのまま上・下五台つづ置かれてあつた。色はほとんど使われず生舞台であつたが、一度ブルー残しで全体を絞る場面があつた。その終り方のスピードがいかに早すぎ、それが少し気にかかつたことを覚えてる。

バレエ・ダンスサーたちはやはり北京舞踊学校の学生さんたちであつた。技術的にそれほど高度のものとは思はれなかつたが、よく訓練のいきとどいたアンサンブルで私たちを楽しませてくれた。そのことは、おそらく今後この舞踊家たちが、東洋における洋舞の大きな弾力になる要素を、充分に含んでいるということに通じりである。

——なにか私たちの知らない大きな刃で、この国全体が着々と前の方に動いている——。そんなことを感じながら、私は北京第一夜の眠りに入つていつた。

翌朝スタッフ会議がおこなわれスケジュールが決定した。今日、つまり九日の稽古は劇場の稽古場でおこなわれ、私たちはスタッフは舞台仕込の完了と道具しらべの予定である。徹夜になるかもしれない。舞台での稽古は十日から十二日の午後まで、十二日の夜は文化・芸術関係の方々への招待日、そして十三日初日、途中十七日と二十一日の休みがあつて二十三日千秋楽。その間日曜・火曜がマチネで十二ステージ。私たちは昼食後さつそく劇場へと向かつた。

天橋劇場は城門外の天橋というところにある開放後できた劇場である。東京でいうなら浅草的な下町で、開放前有名な泥橋市場のあつたものこの近くである。道傍に密柑、支那大根、砂糖黍などを売る露店が並び、餃子屋、酒店、茶館などがこみあつている感じはほんとうに浅草

的であつた。その一廓に足をふみ入れると大道芸人の手品、辻講釈、小屋掛けの奇術、小さな京劇の劇場、映画館、そんなものが多くあつて古い中国庶民の雰囲気はそこには完全に残されている。迷路のようなくねつた細い路の両側には、その他いろいろな店が軒を並べ、多くの人々がその中を、ゆつくり悠然と歩いている姿はまことに大陸的であつた。そんなごみごみしたなかに、ひととき目立つ立派なコンクリートの建物が天橋劇場である。

劇場は建物のちよと中央の部分二十メートルが舞台で、前五分の三位が客席になり、舞台のうしろに二つの稽古場と多くの楽屋がある。建物のほとんどのスペースを客席に取られてしまつた。日本の劇場設計とは大分相違があり、舞台裏が広々として気持がよかつた。客席の座席千五百、舞台の間口十二メートル、奥行二十メートル、高さ十メートルの小ぢんまりした舞台であるが、ふところが充分広くとつてあり、使いやすい劇場であつた。またこの舞台の特長は間口より奥行の方がずうつと広く、そのため舞台光練のハレーションに影響されることなく、ホリゾントの照明設計ができることであつた。

シーリングは中五回線五台、上・下四回線各八台、フロントは上・下十二台つづ六回線、タワー上・下各四回線八台、ギャラリイ上下十回線でスポット十二台

づつが取付けられるようになっていた。その他ポーター四回線四本、ホリゾントライト、サスペンションポーター、フロアコンセントなど数多くあり、器具および回路は充分であつた。ただポーターなどフラッドライトの類は反射が悪く、その大きさに比べ明るさのたりないことも特長の一つであつたらう。器具はソビエツト製のもの中国製のもの半々であり、抵抗器は選択五キロ六十台で、これもソビエツト製でかなりよい性能のようであつた。劇場の人々は皆んな親切で、自分らが完全に仕事を理解するまで充分に打合せをし、一つ一つごつていぬいに仕込をし、どんな場合でも舞台を走り廻ることがない。せつかは決して仕事のスピードを上げるものでないと思つているようであつた。これもごくあたりまえのことである。

私たちは、たつぷり一日かかつて仕込をし、道合しらべをし、三日間舞台稽古をして、昨夜招待日もすませ、今日とにかく無事初日を開けることができた。一つの空席もない満員のお客様で、何度もアンコールの拍手が続いた。今私たちはほつとして、装置の松下君、音楽の林君などと、ホテルの一室で茅台酒、汾酒、ブランデー、ウオトカなどアルコール分のきわめて強いお酒のピンを並べちびちびとやり出したのである。北京の夜は段々と更けてゆく……。

★★★★★
ニユース



アサヒ、フェスティバル・

ホールでの印象

間口十六間四尺、奥行十間という素晴らしい大きなホールが、大阪新朝日ビルに出来た。収容人員は、三千名、将に日本一のキングサイズホールである。

ここで芝居が出来るかなど、はじめは心配だったが、今度、前進座の特別公演をもつて行って、実際に体験した結果は、それほど心配した程でもない。

照明設備も、最近の新しく出来て来るホールのように、幕前のスポットにフレネル・レンズのものを使用せず、集光率の良い、平凸レンズのものが使用されて居り、確にやりよかつた。それから明るさの問題も、舞台の大きさに対しては充分な量を得られた。むしろ明るすぎる位に思はれた。

調光装置も最新式の方式で、一本一本が、別々の方向に動作出来るようになって居る。これも、機能が完全になつていないので、使いづらい感じがしたが、完全になれば、又新しい威力となると思う。

今回の、前進座公演に際して、旧朝日会館から移られた上地一夫氏新しく参加された土山道郎氏等に色々とお世話になつたことを紙上でお礼を申し述べさせていただきます。

六月十日大阪にて

滝尾輝雄

劇場だより 七月(東京)

歌舞伎座 閣下	W氏像	小川 昇
新国劇	大菩薩峠	篠木 佐夫
明治座	御浜御殿綱豊	相馬 清恒
前進座	新門辰五郎	滝尾 輝雄
新宿松竹座	姉妃のお百	篠木 佐夫
中村歌衛門	七月大歌舞伎	滝尾 輝雄
新宿コマ劇場	お染久松	中本 猛雄
ニマ喜劇	愚かなる母	滝尾 輝雄
芸術座	蟻の街のマリヤ	穴沢喜美男
東宝現代劇	夏のおどり	小川 昇
日本劇場	夏のおどり	小川 昇
日劇	夏のおどり	秋山 易三
国際劇場	夏のおどり	山本 順三
S.K.D	幽霊はここに	穴沢喜美男
俳優座劇場	幽霊はここに	穴沢喜美男
俳優座	幽霊はここに	穴沢喜美男
東宝劇場	おんぼろ天使	大庭 三郎
東宝ミニ	すれちがいの物	大庭 三郎
ジカル	湖群で逢いま	松浦光次郎
新橋演舞場	湖群で逢いま	松浦光次郎
松竹新喜劇	湖群で逢いま	齊藤 政雄

▽会員消息△

○新入会員 一八五八年六月

田村 誠一 中野区打越町四二芸術座
戸田 良知 大田区大森八ノ三九一九 芸術座

伊藤 敏吾 千代田区九段一の五 千代田公会堂

○新賛助会員

竜電社 港区芝新橋四ノ六

電話七九〇八・六二五九・六二四九

○脱会

吾妻新一、伊藤安雄、飯島清、石井光徳、石井和三、小島良一、佐々木義一、多賀敏三、戸塚健庫、古屋寿一、藤崎良章、堀川二三男、富本省三、三島純吉、森是、
以上NHK・TV

▽訂正△

先般発行した会員住所録に左記の間違いがありましたので訂正いたします。

○姓名

植草卓爾 は 植草卓爾
理事 中野猛雄 は 中本猛雄
浦田鎌二郎 は 浦田謙二郎

○所風

天谷英夫 芸術座 は 明治座
根本好章 は 第一生命ホール

○住所及電話番号

大野 洋 新宿区戸山町二ノ二〇一
は 新宿区戸山町一戸山ハイツ二号
地二〇一(36)六六六九(呼)

住所変更

都下北多摩郡国分寺町恋ヶ窪 85
渋谷区幡ヶ谷原町 877 松葉荘
板橋区双葉町 34
文京区武島町 21 (92) 4749 呼
杉並区下高井戸 2-557 丸福アパート
中野区大和町 183
世田ヶ谷区松原町 1-119
渋谷区代々木富ヶ谷 1556 (46) 9556
杉並区東田町 2-211
武蔵野市吉祥寺 403 福地方
北区十条仲原 3-4 元田方
目黒区碑文谷 2-1
新宿区花園町 110 美月照明方

N T V
日比谷サーヴィス
研究所
研究
V L
T V
R T
K R
産 K
N 産
松 穴
穴 産
産 産
美 美

中川商店 は(23)一七七四
岩崎電気株式会社 は(39)四八二二
イースタン照明社 は(36)〇二〇六
(368)二四〇二
芸術座 は(59)二二二一
東京宝塚劇場 は(59)二二二一
日比谷公会堂楽座 は(59)二四九四

賛助会員

丸茂電機株式会社

千代田区神田須田町一の二四
電(25)〇三二一

日比谷サービステーション

千代田区内幸町日比谷公会堂内
電(59)四〇〇〇

松村電機製作所

文京区根津宮永町三三
電(82)六一六一

近藤電気工業株式会社

世田谷区経堂一の一三四
電(42)二〇九六・九六一九

イースタン照明社

新宿区戸塚町三の七四
電(36)〇二〇九 (368)二四〇二

電照社

渋谷区伊達町六三
電(44)六七八二・九〇四二

電電社

港区芝新橋四の六
電(43)七九〇八・六二五九・六二四三

編集後記

旅に出る人、帰る人。ともすれば、いそがしさに流されそうなの回かの編集会議を経て、どうやら予定の隔月発行の縁を保つことが出来た第三号です。

然し、今回は会員諸氏の積極的な協力や、又、好意ある外部からの投稿などに力を得て、予期した以上に充実した内容であること、我田に水を引く次第です。うつとうしい梅雨空を眺めながら、編集部は早速第四号の準備に入りました。次号からはニュース欄などもっと豊富な内容にして、出来ることなら一目で会員全部の消息が窺える位にしたいと思つていきます。発行も年内には毎月発行にしてゆく積りです。

—何卒、今後一層の御協力を—
(編集子)

会報 第三号

昭和三十三年六月二十五日発行

発行所 舞台照明家協会

中央区築地四の二

電話〇八五二八

(日本演劇協会内)

編輯人 滝尾輝雄

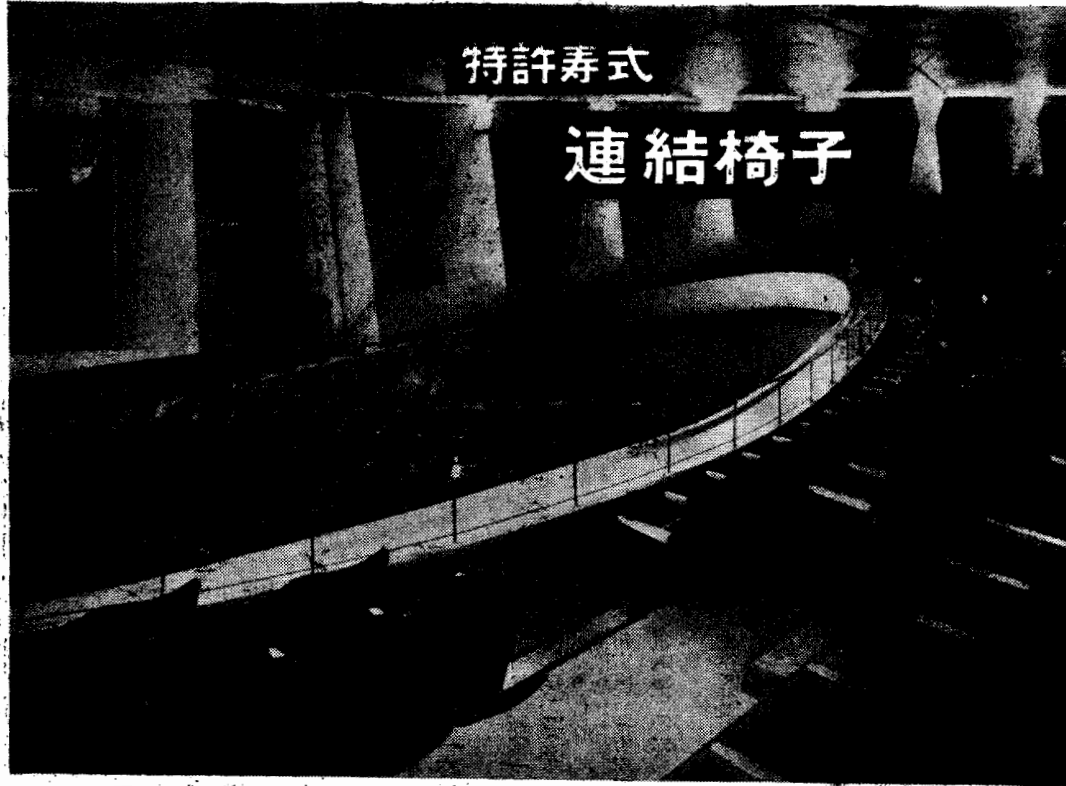
発行人 小川昇

印刷所 福寿堂印刷所

台東区御徒町三の六
電話〇二七七八

(非売品)

40年の研究  500万脚の実績



特許寿式

連結椅子

イスのゴトフキ

特許FK式廻椅転子



株式会社 壽商店

本社 東京都千代田区有楽町1-14 寿ビル TEL (59) 1311 (代表) ~1315
 工場 東京都武蔵野市境 1400 TEL (武蔵野) 3 8 6 2・4 4 3 8・7 2 1 3
 ショールーム 数寄屋橋シヨビングセンター2階 TEL (57) 0 3 0 6
 代理店 大阪・名古屋・広島・福岡・熊本・札幌

